

のは、文筆家としての二人の力量もさることながら、上記二つの年代の体験者として、自らの経験した事柄をできるだけ客観的に叙述しようと試みながらも、時代の子としては、彼らの見聞したことにコミットせざるをえぬ、この相反する二方向の力関係の間に生ずる独特の色合いであると言ってよいであろう。しかし、1970 年代も中間点を過ぎ、やがて 1980 年代を迎えようとする今日から見れば、1920 年代も 1930 年代も遙か過去のことである。それに比較すれば、1960 年代は、1920 年代に関する F. L. Allen の著書 *Only Yesterday* のタイトルがまさに適切な「つい昨日のこと」である。ここに取り上げた書物は、副題にあるように、その「つい昨日のこと」の 1960 年代のアメリカ文化を論じた著作であり、疑いなく著者は同年代を身近に体験していることを考えれば、時代へコミットする程度も自ら深くならざるをえないであろうし、平安な 10 年間であったとは決して言えぬ 1960 年代からある程度距離を保って、客観的に眺めるのが困難であることは、容易に想像できるところである。著者がどの程度の客観性を持って、また、どこに主観性を置いて叙述しているか、本書でもっとも興味深いのはそこである。1920 年代や 1930 年代とは異なって、1960 年代は、評者を含めた読者にとっても「つい昨日のこと」であるから、著者の主観性、客観性云々は、とりもなおさず、読者のそれにひきつけて考えられるからだ。そうした観点から本書を読むと、書名の *Gates of Eden* という言葉が俄に意味を持ってくる。なぜなら、ここには紛れもなく著者の主観が反映しているのだから。

1960 年代のアメリカといえば、内憂外患で問題山積の 10 年間であり、その多くが 1970 年代の今日まで持ち越されていることは、今更多言を要さないだろうし、そのなかでアメリカ文化も大きく揺れ動いたことは当

Morris Dickstein: *Gates of Eden: American Culture in the 60's*

平 野 信 行

何事であれ、鮮烈に印象付けられた体験は容易に脳裡を去り難く、ある程度の距離を置いて客観的に眺めるのが困難である場合が多いが、ある時代ないし年代を論じるとき、このことはことに明瞭に看取されるようである。

たとえば、1920 年代、1930 年代について種々の回想的著作を公にしている Malcolm Cowley や Edmund Wilson の例を考えてみるとよい。彼らの作品が読者を惹き付ける

然である。そうした動揺の 1960 年代のアメリカ文化を Gates of Eden と言えるのか、本書を手にしたときにまず評者の頭に浮かんだのはこの疑問だった。しかし、頁を追って読み進めるうちに、書名がそのまま本書の内容ではないことに気がつく。書名だけを切り離せば、なるほど、どうみても平穏無事とは言えない 1960 年代のアメリカ文化を楽観的に捉えているかに思えるが、じつは、著者の主眼点は、同年代のアメリカ文化の諸相を具体的に分析することにより、そこから新たな文化の可能性を探り出すことにある。彼は決して 1960 年代を Eden と見做すのではない。時代としては、むしろサタンの横行する地獄だが、しかし、そのなかに、やがて Eden の来る可能性がある。すなわち、Eden へ入る gates が見える、著者はそう言いたいらしい。そして、その可能性を探る手懸りとして、彼は new sensibility なる言葉を用いるのである。

1960 年代について“new”と言われると、またかという感じがしないでもない。なにしろ、new rock, new journalism, new radicalism など、new という形容詞を冠すればすべて説明がつくかのように、1960 年代論の多くには、種々の場面に new という単語が用いられているのだから。しかし、本書における new sensibility は安易な言葉ではない。著者がこの表現にこめているのは、文学、音楽、ジャーナリズムその他の諸々の文化現象のなかに、明確にあるいは暗にみられる、さまざまな情動から抽出されるある種の方向性ないし志向性なのである。揺れ動く 1960 年代のアメリカ社会には、怒り、不安、不満、絶望など、いろいろの感情が渦巻いていた。それらは、文学、音楽その他に描写され、あるいは、人種暴動や大学紛争の形で噴出し、また、麻薬の蔓延といった現象に顕著に出ている。このような感情の爆発の行き着く先は

どこなのか、著者のもっとも大きな関心はその点にある。このことに関しては、激動の時代の渦中にあった著者がいかなる体験をし、どのような感慨を抱いたのか、読者として興味のあるところだが、幸いにして、本書の記述には自伝的要素がかなり多く、new sensibility という表現も著者の直接体験から生まれたものであることがわかるのである。

著者が述べているところによると、彼の家は正統派ユダヤ教徒で、はじめコロンビア大学に、後にはケンブリッジ、イエール両大学に学んだが、本書を書いている時点で振り返ってみると、その当時の経験は 1950 年代と 1960 年代を繋ぐ役割を果たしたという。現在 37 歳の著者にとって、1950 年代は多感な青春時代である。その期間の体験が 1960 年代にどう具体的に関わるのかという点は、本書からは必ずしも明らかでないが、人間形成の重要な時期に見聞ないし行動した結果得たものは、それ以後の段階に大きく影響するであろうから、著者の 1960 年代観に 1950 年代の体験が重要な意味を持っているであろうことは想像するに難くないところである。それでは、著者は 1960 年代のアメリカあるいはその文化をどのように捉えているであろうか。

まず、1960 年代全般については、その 10 年間の出来事は彼にとって liberating であったと言う。そう言われると、読者は、何を liberate するのかと問いたくなる。それに対して、本書から直接の答は得られない。先に触れた 1950 年代の体験と 1960 年代との関係といい、この liberating の対象は何であるかといい、読者の知りたいことが必ずしも明確でないのが、本書に対して不満を覚える点であり、その不足は想像によって補わねばならない。たとえば、liberating の対象については、1960 年代の彼は authentic selfhood を求めていたと述べているところから、おそ

らく、脳裡にあったのは、1950年代と1960年代の質的な懸隔と、前者における自己の意味の吟味ではないかと思われる。その結果として、著者は1950年代の自己に authenticity を与えられず、ひるがえって1960年代のそれに authenticity を求めたのではなからうか。求めた結果がどうであったか、それは、彼が1960年代アメリカ文化の諸相を論じているなかから判断するしかない。

著者のナマの言葉を用いるならば、この年代は the second wave of modernism を迎える舞台設定の時期であった。彼の説明によると、“every modern movement at first looks ugly and inartistic to the extent that it dislocates existing norms. Only later does it create its own norm which gets established but eventually succumbs to imitation, self-caricature, a certain devolution of energy (which readies the scene for the next avant-garde)” というわけである。この文章の内容それ自体にはとりたてて独自といえるところはないが、ここで著者が指摘する modern movement における norm(s) の混乱と確立は重要である。なぜなら、彼の言う norm は種々の方向への拡がりを持ち、そのなかには当然、時代の尺度、自己の判断規準、さまざまな文化現象に対する批評の標準などが包含されているはずであるから。そのなかから、ユダヤ系のアメリカ人である著者がユダヤ系アメリカ作家に用いている norm を取り上げてみよう。

たとえば、彼は、Norman Mailer の *Armies of the Night* を評して、すぐれた自伝であり歴史書であると言う。さらに、この作品は性と自己に関する形而上学確立への道を拓くものであると述べている。そして、作者の執筆の姿勢について、confronting the

confrontations of the period with his personal witness と捉えるのである。われわれは、こうした著者のいわば critical norm の背後に modernism という norm があることを忘れてはならない。そこから、*Armies of the Night* のどこが modernism とどのように関わるのかということが当然問題になってこよう。評者の偏見かもしれないが、ふつう一般に定義されている意味での modernism との関連性を Norman Mailer の作品のなかに見出すのは困難に思えるからである。modernism の要件を Ihab Hassan が *Paracriticism*s で列挙しているなかにある、たとえば、都市化、非人間性、技術主義といったところに求めるのであれば、彼の作品も modernism のカテゴリーに入るだろうが。

同じユダヤ系作家でも、Saul Bellow に対する評価はまったく低い。わずかに *Mr. Sammler's Planet* を1960年代観を知る標準として挙げているのが目に付くぐらいである。おそらく、Bellow は著者の考える modernism の norm から外れるのだろう。ユダヤ系作家に限らず、modernism を norm として1960年代のアメリカ作家を裁断してゆく著者の缺の入れ方はかなり大胆である。そこに読者は彼の独自の眼を見ることができ。しかし、反面、そう単純に切れるのかという疑問も残る。先に指摘した用語の規定の不明確なことや、ところどころ論旨の明快さを欠く点など、本書には不満を感じるところはあるが、全体としては、1960年代のアメリカ文化論としてなかなか面白く、刺激的な読み物である。

Gates of Eden: American Culture in the 60's by Morris Dickstein. Basic Books. 300 pp.